

■ 名古屋市美術館の建物

ことができます。公園には広場や噴水があり、多くの人が行き交い、初夏は新緑、秋は紅葉と、都会にいながら自然の移ろいを感じることができる場所です。その公園の自然に包まれるように美術館の建物はあります。この建物は黒川紀章（1934－2007）の設計によるもので、建築としても高く評価されています（図1）。

美術館（1982年）、広島市現代美術館（1988年）、和歌山県立近代美術館・博物館（1994年）、オランダのファン・ゴッホ美術館新館（1998年）、国立新美術館（2006年）など博物館・美術館の建築も数多く手掛けています。名古屋市美術館は1987年の世界建築ビエンナーレ銀賞を受賞した作品で、黒川紀章の代表作の一つとして知られています。



図1 名古屋市美術館外観
建設当時に近い頃に撮影

名古屋美術館で
は開館の翌年9月に
常設企画展「黒川紀章と名古屋美術館展」
を開催しています。美術館は開館から1年余
りで100万人以上の来館者を迎えており、そ
の数は、当時の地方美術館としては飛びぬけ
た数字でした。展覧会の小冊子では、「・・
美術館活動が繰り広げられる場、あるいは空
間としての美術館の建物の魅力があげられる
でしょう。名古屋美術館は、単に美術品を
展示、収蔵するための箱としての存在に止ま
らず、それ自身が強い表現力を備えた一つの
美術品ともいえるのです」と、多くの方にご
来館いただいた理由として建物の魅力を挙げ
ています〔1〕。

■ 建設に向けての協議

黒川紀章によるさまざまなアイデアが織り込まれている建物ですが、美術館としてどうあるべきかについては、建設委員会が組織され協議されました。昭和58年1月、美術館調査委員会から答申『名古屋市美術館（仮称）の基本構想について』が出され、それを受けて、昭和58年7月から昭和60年1月まで計8回（基本設計に関して5回、実施設計に関して3回）、建設委員会が開催されています。委員長の伊藤延男（東京国立文化財研究所長（当時））をはじめとした美術館関係者を含む委員7名に、行政から3名が参加した10名で構成されました。昭和58年8月の第2回目には設計者の黒川紀章も出席し、基本構想の確認と意見交換。第3回目には黒川紀章から地下1階、地上2階建てのA案と、地下1階、地上3階建てのB案の2案が提出され、その後の委員会を経て、地下1階、地上2階建ての案に集約されていきました。

委員会では、委員が質問・意見し、黒川紀章が次回に解決策を示すという流れで、かなり突っ込んだ議論が展開され、建物のつくりと美術館活動にかかわる実際的な課題が協議されています。答申では企画展示室は原則と

して1階、常設展示室は2階と提言されていましたが、常に開室している常設展示室を1階にしたかどうか、また有料エリアと無料エリアをどのように設定するのかといった、「美術館をどう使うのか」という視点から再検討されました。また「地階の展示室は、外光の入り方の具合が来館者の心理面にも影響する」といったことも挙がっています。ほかに、屋外彫刻の管理スペースの明確化、障がい者対応、ガラスへの映り込みを考慮した固定ケースの配置、自然光の取り入れ具合、搬入口の高さや位置など、現在でもしばしば直面する課題が話されています。企画展示室の固定ケースについて、屏風を展示する際に必要な奥行を確保しようとすると、作品と鑑賞者の距離が離れてしまうため調整が難しいといったことや、可動式ケースの収納場所の必要性は重々認識しながら、限られた用地のため確保することが困難であるといった、理想を語りながら現実的な着地点を探していった姿が見えてきます〔2〕。

30年過ぎた今でも作品を収集、保存、調査、展示する「館」としての美術館の基本的な機能は変わっていませんが、美術表現・媒体は多様化し、施設として求められているものも変化し、「館」の利用者（鑑賞者）の美術に



図2 建設委員会にて説明する黒川紀章
(昭和59年9月6日)

する予算や援助が年々厳しくなっているという、各国、各自治体の事情もそこに影響していることは間違いありません。自活することを求められるという点では日本も同じですが、そのことと観光施設を目指すことがイコールになるわけではありません。理想的な活動を維持するために足元を固めること、経済的な基盤を強化することが必要なのは当然ですが、決してその逆ではありません。現在の美術館が置かれている厳しい状況の打開を性急に目指すあまり、目的と手段が逆転しているのではないかとそんな危うさを感じているのは私だけでしょうか。(F)

時の話題

美術館は観光スポット？

「博物館などの所管、首長部局も可能に」という記事が新聞に掲載されていました。社会教育施設として、本来教育委員会が管轄する博物館や図書館などの施設を、自治体の判断で県知事や市長などの首長部局が所管できるようにしては、という提案です。それにより、観光や地域おこしを担当する部署との連携がスムーズになり、地域活性化を促進することが可能

になるという判断のようです。昨年話題になった「観光マインドのない学芸員は一掃すべき」という、ある大臣の発言にも通じる提案ともいえるかもしれません。この流れを受けるように、今年4月に開催された、政府による構造改革推進会議の一つには文化庁が作成した「アート市場の活性化に向けて」という資料が配布されています。そこには「文化への〈投資〉」、「文化経済活動」、「日本ブランド価値の最大化」といった、美術と経済を直結させる言葉が至る所に散りばめられています。

博物館施設が地域の重要な観光資源の一つであることは間違いありません。ルーヴル



写真は栗木義夫さんの作品「樹木の領域」
名古屋市白川公園 1988年

対する見解・価値観も変わってきました。開設時にどんな美術館にしたいと思っていたのかを知ること、美術館としての基本を知ることであり、そこから「変わるべきもの」と「変わらざるべきもの」を見極め、これから多くの方にご利用いただける館の姿を求めていきたいと思っています。

■ 黒川紀章の「共生の思想」

ご来館いただくだけでは美術館の建物がどのような形をしているのなかなかイメージがつかめないかもしれませんが、建物はV字型をしたユニークな形をしています(図1)。黒川紀章は、「実際に設計にとりかかってみると、公園内に建設できる延面積の制約、建ぺい率の制約、高さの制約など、その条件の厳しさがあった。・・・(略)・・・しかも、その敷地の形状は三角形状のかたちである。このような厳しい制約を、いかに逆手にとって建築をつくるかが私に与えられた課題でもあった」〔3〕と記しており、敷地を有効に活かした結果、二つの軸をもつ、ちょうど「ホチキスを横にしたような形」のユニークな美術館の建物が生まれました。

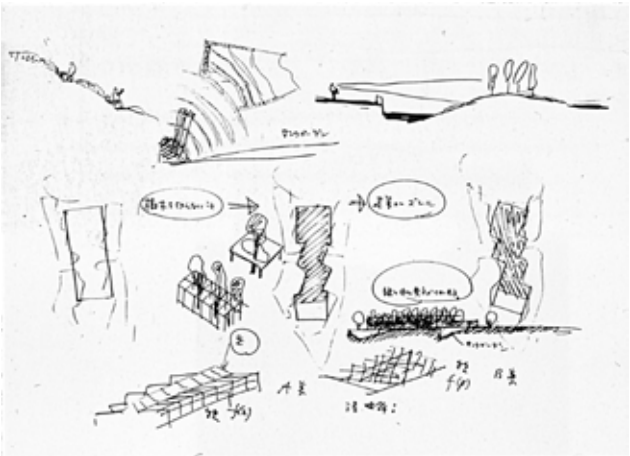


図3 黒川紀章によるコンセプトを伝えるドローイング

展覧会の舞台裏

「タイトルをどうするか」

展覧会のタイトル。これは簡単なようでいてなかなか決まらないものです。個展形式であれば当然その作家名やグループ名、コレクション名などがメインのタイトルとなります。ゴッホ、モネ、ピカソ、上村松園などなど、誰もが知る有名作家の場合は、なによりも先ずその作家名を前面に打ち出すことが有効な広報となります。個人作家ではなく、まとまった一つのコレクションによる展覧会の場合、例えばエルミタージュ美術館やルーヴル美術館など、美術館の知名度が高い場合も同様です。とはいえ、これらの知名度の高い作家やコレクションの場合、個展形式の展覧会も日本では繰り返し開催されていることが多く、以前の展覧会と差別化を図り、新たな関心を引き起こすためには、メインとは別の魅力的なサブタイトルを考える必要があります。逆に作家名やコレクション名があまり知られておらず、日本で紹介するのが初めて、あるいはそれに近い状態の時にも、サブタイトルに工夫を凝らす必要があります。場合によっては、メインよりもサブに注目を集めるような戦略を取ることもさえあります。具体的な例を挙げて説明しましょう。7月1日に終了した「モネ それからの100年」展の場合です。

この展覧会については、「展覧会現在進行形」のコーナーでも昨年ご紹介しましたが、名古屋市美術館にとって4度目のモネ展にな

名古屋市美術館の建物は、黒川紀章が提唱した「共生（きょうせい）の思想」に基づいて建てられています。黒川紀章は「共生」を「本質的な矛盾、対立があり、しかし相方が相方を必要としている関係」と定義しています〔4〕。西洋と東洋、精神と肉体、自然と人間、芸術と科学、先端技術と伝統といった二つの関係を明確にわけのではなく、生物学の「共棲（きょうせい）」と中学生のときに東海学園にて学んだ「共生（ともいき）仏教」をもとに新たな概念として主張しました。名古屋市美術館の建築にも、「自然と建築の共生」「内部と外部の共生」「異質な文化（要素）との共生」「歴史と現代の共生」「部分と全体の共生」といったテーマが取り込まれています。

「自然と建築の共生」は緑豊かな公園に建設されることから、主要なテーマとして意識されていたようです。黒川紀章は設計委員会にて初めて設計案を説明する際に、「この回りにさわめて重要な樹木があり、それをできるだけ動かさないようにする。公園の緑、自然と調和したものをつくるということがある」と述べています〔5〕。外観写真(図1)をご覧くださいとわかりますが、建物全体が樹木に取り囲まれており、建物の高さが樹木の高さに抑えられ、方向によっては木々でその建物が見えないほどです。現在では樹木も育ち、また科学館もリニューアルされ公園内の様子は変わりました。しかし、木々のなかに見え隠れする美術館のあり様は残されています。来館者は美術館に到着すると、まずエントランスポーチにある格子状に組まれた屋根のない特徴的な空間に迎えられます。これは「内部と外部の共生」

ります。さらに人気の高い作家ということもあって、全国的に見れば極めて頻繁に展覧会が開かれており、どうやってそれらの展覧会と差別化を図るかがタイトル決定の重要な要素となりました。さらに今回は個展ではなく、モネと現代美術との関係を探る展覧会で、出品点数も現代美術が7割ほどを占めるという構成でしたので、そのあたりの事情も含めた内容が簡潔に伝わるタイトルが求められていました。要するにかなりハードルの高い要求を満たす必要があり、主催者一同相当に頭を悩ませたわけです。そしてその結果選ばれたのが「モネ それからの100年」というタイトルでした。モネが晩年に睡蓮の壁画に取り組んでから現在までの約100年間における、モネと現代美術の関係を検証する、という意味を込めて付けたタイトルなのですが、正直その意図がこの短い言葉でどこまで伝わるか不安な部分もありました。

案の定というべきか、展覧会がオープンしてしばらくの間は、モネの個展と勘違いされて来館される方が少なからずあり、タイトルと中身が一致していないとお叱りの言葉を頂戴することもしばしばありました。しかし、会期が進むうちに次第にそのような誤解も減り、後半はまさにうなぎ上りという感じで来館者数が増えた点を見れば、主催者の意図はある程度まで伝わったのではないかと推測します。結果の詳細な分析はこれからの作業になりますが、タイトルも含めて今回の展覧会 は、とかく取りつきにくいと言われる現代美術の紹介にとって、一つの可能性を示唆したのではないかと考えています。(F)

を意図しています。日本家屋に見られる縁側は、風や日差しといった外気を感じながら景色を眺めたり、家族とおしゃべりをしたり、あるいは出入口になったり、さらに縁側は廊下としての機能も果たしています。黒川紀章は、こうした内部とも外部ともつかない中間エリア、曖昧なスペースが人と建築により多くの意義や物語性を生みだすとし取り入れています。ここでも、建築内部のような、庭のような空間を創り出しています。

建物の内外には、ほかにも多くの仕掛けがあります。正面玄関入口に入る手前には鳥居があり、サンクンガーデンのところに见られる壁は、日本の伝統的な壁塗りの一つである「なまこ壁」を取り入れています(図4)。また、内部の吹出口には伝統文様の猪目紋が、展示室の入口の上部には梅鉢文がもとなったデザインが見られます。西側の階段には、ちょっと変わった形の窓があります(図5)。これは城壁に見られる狭間(さま)のようであり、さらに図書室にある大きな円形の窓は、江戸の天文図がもとなっています。いずれの窓も印象的な建物の外観を生み出しています(図6)。



図4 サンクンガーデン壁面

感想ノートから

真島直子 地ごく楽

2018年3月3日(土)～4月15日(日)

真島直子(1944ー)は名古屋市出身の現代美術作家です。美術に興味や関心のある人には知られていますが、一般に広く知られている作家ではありません。ご来場のお客様は、古くから作家のことを知っている方と今回はじめてその存在を知り、作品を見る方とに大きく分けられるようです。はじめての方には、チラシやポスター、新聞や雑誌、テレビなどの広報を目にし、「何かはよくわからないけど、気になって来た」という方が少なからずあったようです。また、2度、3度とご来場になった方もあったようです。展覧会名にある「地ごく楽」という言葉もお客様をひきつけたようです。

「とても独特な世界観で一気に引きこまれた。恐ろしいのか可愛いのか分からない作品の数々。素晴らしかった。」

「人間にとって最小の単位、根元的なものが描かれている気がして、言葉では説明できないけどとてもひきこまれました。」

「何か得体の知れない、でも自分の中にある何かがわたしの中でうごめいていて、この空間に身を置いて初めて感じるこの何とも言え

ない実感がすごく小気味良いです。」

「作品にすべて魂をもっていられるような感覚で、見ている最中は何も考えることができませんでした。何も頭に残らなかったのも、真島さんの作品のどのようなところがすばらしかったかと聞かれたら何も答えられないけれど、どの作品にも『美しい』と感じたのはたしかです。」

「はじめ、みてはいけないものをみたような気がしました。でもこれはみたいもののだと感じた。密林が女神になっていく様子はすごかった。私の中にも外にも密林があって、私が出来上がっている。妖精が笑っているようにみえた。最後はいやされた気がする。」

「とても『生』が恐ろしく感じました。平面作品は転生しそうな雰囲気を抱きましたが、ミクストメディアの密林の女神や妖精などでは朽ちることの美しさを感じた気がします。地ごく楽のコイたちはクモの糸にすがる亡者に見えたり、ゾンビのように見えたり、作品1つ1つが見る私たちによってガラリと印象を変えてゆく、面白い作品ばかりでした。」

「『感想』を語ってしまうと、その言葉が全て嘘になる気がする…そんな作品たちでした。何となく、ふと勝手に、地獄も極楽も、あったとしたら何もない所なんだろうな、なんて思いました。」

(み。)

展覧会 現在進行形

名古屋市美術館開館30周年記念
ザ・ベスト・セレクション
2018年10月6日(土)～11月25日(日)

これまで当館では、10年ごとにその活動を振り返る特別展を開催してきました。まず、開館10周年の1998年には、「近代美術 4つの焦点 名古屋市美術館所蔵作品展」を開催しました。収集を開始した1983年から約15年間で集まった約2000点の作品の中から、当館の

収集方針の「4つの柱」(エコール・ド・パリ、メキシコ・ルネサンス、郷土の美術、現代の美術)ごとに代表作を40～50点程度選んで展示する内容でした。次の開館20周年(2008年)には、「20年のあゆみ展」と題して、総数約4300点の所蔵作品から55点を選んで展示したことに加えて、これまで実施してきた教育普及活動や催事の振り返りをパネル等で展示しました。また、来館者から募集した所蔵作品の人気投票の結果や美術館にまつわる思い出なども紹介しました。

さて、開館30周年の今年も、やはり最近10年間の収集の成果をふまえて、所蔵作品につい

て広く知っていただく機会が必要だと考えました。他館の例を紹介すると、昨年35周年を迎えた三重県立美術館は、洋画を中心に所蔵作品をほぼ年代順に並べて、明治から現代に至る日本の絵画史がたどれるような展覧会を企画しました。また、今年30周年を迎えた茨城県近代美術館は、寄贈によってどのようにコレクションが成長していったのかを紹介する展覧会を開催しました。それでは、当館はどのように30周年記念展を構成すべきでしょうか。当館は先に挙げた4つの収集方針に従い、偏りはあるけれども個性的なコレクションを築いてきました。類は友を呼ぶと言うべきか、

メキシコ美術を収集しているが故に、メキシコゆかりの作品の寄贈をご提案いただいたり、郷土作家の調査を通じて、その周辺作家に関する情報や資料が集まったりします。こうしてコレクションは徐々に濃く、深くなっていきましたが、中にはまだ十分に日の目を見ていない作家や作品もあります。例えば当館所蔵作品の作者のうち、芥川賞作家でもある人物が二人いるのですが、ご存知でしょうか。一人は比較的名有ですが、もう一人はほとんど知られていないでしょう。こうしたエピソードも交えて、コレクションの知られざる魅力を引き出すことができればと考えています。(nori)

郷土の作家たち

伊藤 廉（いとう れん／1898－1983）

1898（明治31）年10月7日名古屋市に生まれる。1912年愛知県立第一中学校（現・愛知県立旭丘高校）に入学、弓術、器械体操などの運動競技から次第に文学・美術へと関心を移す。明治大学文学部、愛知県立医学専門学校への入学、中退を経て本郷絵画研究所に学び、1920年東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科に入学。官展で活躍した同郷の洋画家・佐分眞は同い年で同窓。在学中の1923年、第10回二科展に初入選を果たす。1925年に卒業すると1927年10月渡仏、現地の日本人作家だけでなく当時パリにいたヴラマンクやシャガールらと知遇を得たほか、福島繁太郎夫妻を通じてジョルジュ・ルオーと出会い、制作を一時期手伝う。西欧諸国を歴訪後1930年に帰国し、滞欧作14点を特別陳列した第17回二科展で二科賞受賞。同年10月、独立美術協会の創立会員となるが1937年退会。梅原龍三郎の誘いで1943年より国画会会員となる。戦後間もない1946年、安井曾太郎の招きで東京藝術大学講師となり、助教授、教授を経て1961年美術学部長に就任。1966年定年退官した後は同大名誉教授となる一方、愛知県立芸術大学の創設にあたり同大学美術学部長に就

どっがおもしろい?!

ジャン・メッツアンジェ 《静物》
 油彩・キャンヴァス 49.0×60.0cm
 個人蔵（名古屋市美術館寄託）



今回は、フランスの画家ジャン・メッツアンジェ（1883～1956）による《静物》（当館寄託）を取りあげます。メッツアンジェは、20世紀初頭にピカソとブラックによって創始された「キュビズム」に影響を受けた画家で、理論家としても活躍しました。キュビズムとは、ものの形を球や円柱などの単純な図形でとらえなおし、再構成して描く方法のこと。視点を固定せず、さまざまな角度から見たものの形を組み合わせ、絵画や彫刻にするのです。さて、一見抽象的なこの絵をご覧になったみなさんは、描かれているものをどのようにとらえたのでしょうか。

くだものに、にてるものがある。お茶をいれるようなものがある。（みさき 8歳）

じっけんのどうぐみたい うごきそうなかんじ えきたいがながれているようなかんじがする いろはざんしん かたちはかくかくしてる ちょっとだけきれい（あいこ 7歳）

じっけん室かな？食たくな？いろんなほうこうから見たら、いろんな絵に見える。そこがおもしろい！（六花 8歳）

机に置かれている一對の物体はポットなのだろうか。中に入っているのは水？では溢れている緑－赤のグラデーションは？完全な立体として描かれていない牛乳パック(?)など、疑問を煽り、いつまでも眺めさせられてしまう作品だと思いました。（1985 20歳）

「顔かな？」と思った。画面や上方の2つの丸が目で、画面中央の赤・緑・黄・灰がまざったフワフワのものが鼻。画面下方の黒丸が口。取っ手のようなものが耳で、ななめの線はあごのラインetc…（たけのこ）

つくえの上にやかんが置いてあって、そのやかんの上にタイマーが置いてあり、もうひと

任し、当地の芸術文化の推進に勤しむ。退職の十年後、1983年1月に逝去。

30代半ばまでは、彫刻のモデリング（塑像制作における肉付け）をも想起させる筆致で存在感豊かな人物画を制作したが、愛娘の死を機に、描く対象を山や静物に移した。量感や陰影、色価や構図の研究からは、セザンヌの造形理論の影響が強く窺える。1935年刊行の『ルオー画集』をはじめ『絵の話』『デッサンのすすめ』『セザンヌ覚書』『油絵のみかたについて』など著作も多く、作品の見どころや時代背景、作家の意図を平易な言葉で端的に伝える文章と的確な例示は、制作者と教育者、両面の才能と知性を垣間見せる。

2014年11月から2015年1月にかけ、碧南市藤井達吉現代美術館が没後30年を記念する展覧会「もうひとつの『絵の話』 伊藤廉」を開催、その功績を改めて知らしめる機会となった。（3）



伊藤廉《雨上がりの窓の静物》1981年 名古屋市美術館蔵

つのやかんからは色とりどり湯気が出ていて、その湯気が皿の中に入っていくのがおもしろい。（れっちゃん 9歳）

左のコップが人の顔みたい。液体がこぼれているので、早くふきたくなる。子供が飲み物をこぼして「早くふきなさい!!」と言っている時の状況と同じ（笑）（まきこママ ？歳）

毒物か？と思うような変な液体がでているように思います。一体何なのでしょう？しかも緑でヤバイと思うのに化学反応を起こしたのが、黄、赤と…掃除したくなってしまうのですが、ベタベタするのでしょうか。手紙があるのが気になるので、早く片づけたいですね。（泳み人知らず 29歳）

私ははじめに見たとき、理科の実験かな？と感じた。ボトルの液体を混ぜて、緑色の泡がぶくぶくと発生しているイメージがした。テーブルも木のところと金属のところがあって、理科室の机っぽいなって思った。あと、青い箱は危ない薬品でも入っていそう。物の立体の面を平面にすることで、リアルではありえない見え方ができておもしろい作品だと感じた。（まつを 20歳）

丸い形がフラスコ、蛍光色の部分が化学反応を起こしているように見え、おもしろく感じた。茶色い机のような部分に奥行きを感じるのに対し、青色や蛍光色で構成されている画面中央は平面に感じられる。（ハゲ鍋 23歳）

作風的には、直線的、抽象的で、細部を省略したすっきりとした作品になっている。画面の線の配置は見ていてリズムカルで心地よい印象を受けた。しかし、キュビズムにしては装飾的で世俗化しすぎたような気もする。作品のテーマはよく分からないが、どこか日常を描いている雰囲気がある一方で、風刺的な構図にも見える。（walking 19歳）

水差しや湯気?などはキュビズムでデザインのように描かれていますが、テーブルの木目はリアルに描いてあり、またそれが作品に温かみを出しているように思います。また水差しがなぜか2つ並んでいます。それも同じ向きで整列させているかのよう。しかし、注ぎ口の位置は違います。それでもテーブルの形、中央奥の壁のデザインが左右対称に近く、鏡で映し出したかのような構成になっており、興味深いです。見れば見るほど、何を見て描いたのか気になってしまいます。（からあなご）

水色のモチーフが、ポットや実験道具に見えたり、人の顔に見えたり。散らかっているのか、それともある意図に沿って並べられているのか。同じ絵を見ても、人によってさまざまな見方が生まれるって、おもしろいですね。（haru）

国島 征二（くにしま せいじ／1937－ ）

名古屋市港区で生まれる。旭丘高校美術科に進学。一級上に赤瀬川克彦（原平）が、同級には荒川修作がいた。画家を志し上京、武蔵野美術大学に入学し、赤瀬川を頼って彼の下宿の近くに住みついた。この時期は平面作品から半立体作品を制作していた。21歳の時、「安保闘争」の学生運動に関わり、大学を中退し名古屋に帰省。父親の土地にアトリエを構え、県立高校の美術教師を務めながら、制作を続けた。1963（昭和38）年、名古屋の桜画廊で個展を開催。1969（昭和44）年には、アメリカに渡り、南米、スペイン、ポルトガル、イギリスを移動、1年2か月で日本に帰還している。

1973（昭和48）年、紙と樹脂による彫刻の制作をはじめるとともに、この年庄司達、野々村宇旦とともに「紀伊長島彫刻シンポジウム'73」に参加し、入選している。この時の花崗岩との「格闘」が以後の石を素材にした制作の転換となる。1979（昭和54）年以後、黒御影石を用い、磨いた部分と槌跡の痕跡をとどめる部分を対比した作品を制作している。また、大理石と木、金属を組み合わせた作品は、ストイックなミニマル・アートとは一線を画

協力会通信

対照的な展覧会 「横山大観展」と「絵描きの筆ぐせ、腕くらべ」

今年も協力会の春のバスツアーが6月24日(日)に実施されました。昨年春のバスツアーは、「遥かなるルネサンス」と「ベルギー奇想の系譜」という、ヨーロッパの近世絵画の良品が見られる展覧会を鑑賞しに神戸に行きましたが、今年は京都国立近代美術館で開催された「横山大観展」を目当てに、京都文化博物館の「otto・ネーベル展」と泉屋博古館が所蔵する近代日本画の特集展示「絵描きの筆ぐせ、腕くらべ」をあわせて鑑賞する、日本画の割合が高めのツアーとなりました。

横山大観（1868－1958）といえば、その画業がそのまま近代日本画の歴史の一部を成しているといっても過言ではありません。慶応4年（明治元年）に生まれた大観は、1889年に開校した東京美術学校の第一期生でした。また、岡倉天心の東京美術学校校長辞職に端を発する1898年の日本美術院の創設、また岡倉天心の逝去をきっかけとした1914年の日本美術院の再興に際しても中心メンバーとして活躍しました。生誕150年を記念したこのたびの「横山大観展」は、画題や表現に新しい要素を大胆に取り入れ、西洋絵画に比肩し得る「日本画」の確立と近代化に邁進した大観の功績を、《山路》や《生々流転》、《夜桜》、《紅葉》などの錚々たる代表作で迎えることが

イベントガイド

■特別展

名古屋市美術館開館30周年記念 至上の印象派展 ビュールレ・コレクション
 会期：2018年7月28日(土)～9月24日(月・休)
 料金：一般1,500円、大学生1,000円、高校生800円、中学生以下無料
 高校生無料デー：8月31日(金)までの開館日
 学生証提示

スイス・チューリヒのビュールレ・コレクションは世界でも有数のプライベート・コレクションとして知られています。特に印象派とポスト印象派の充実ぶりは素晴らしく、モネ、ルノワール、セザンヌ、ファン・ゴッホなど著名な作家の代表作がずらりと揃っています。

今回は印象派を中心に、コレクションから精選された64点の傑作の数々をご覧くださいますが、そのうち、約半数が日本初公開となります。中でも4メートルを超えるモネの《睡蓮》の大作は、今回初めてスイス以外で展示されます。どうぞお見逃しなく。

【関連催事】

●作品解説会（※事前申込制）

①日時：8月18日(土) 午後2時から

し、伝統的な空間や景観を想わせた。

1976（昭和51）年、ロサンゼルス の《Space Gallery》に於いて個展を開催、以後、ロサンゼルス の同ギャラリーと名古屋の桜画廊に於いて1991（平成3）年まで定期的に個展を開催している。1984（昭和59）年にはアメリカの永住権を獲得し、アメリカでの評価を揺るぎないものとした。

一方で、彫刻家はプライベートな作品として《WRAPPED MEMORY》というシリーズを制作し続けている。作家の許に届く展覧会の案内状は束ねられ、鉛で包まれ、あるいは蜜蝋で固められ、言わば「コンパクト・オブジェ」として成立した。その素材も多岐に亘り、同シリーズは日記をつけるように制作され続けている。1998(平成10)年、帰国。現在岡崎市に在住。（J.T.）



国島征二《Suspended Pool》1993年 黒御影石、ブロンズ 「名古屋発現代美術展 POSITION 1994」での展示風景

できる充実した展覧会でした。

大観は、明治30年代にいわゆる「朦朧体」、それまでの日本絵画の骨子たる「線」を排して色彩のぼかしを多用する手法を追求し、明治末から大正期にかけては、ヨーロッパの印象派や南画からの影響をうかがわせる、点描風の筆致や鮮烈な色彩、軽妙な線描による表現を展開しました。また、大正期には今村紫紅、川端龍子、速水御舟ら、大観より若い世代が台頭し、存分に個性を発揮するようになりました。彼らは時代の開拓者として、美術史上にその名が刻まれています。が、しかし一方で、急進派より数多くいたはずの穏健な作風の作家たちは、たとえ高い技量を誇っていたとしても、今ではほとんど忘れられています。とくに「筆づかい」の点では、色彩に比較的低かった急進派の画家よりも、伝統的な技法に基礎を置いた穏健派、中でも明治期に活躍した画家のほうが技術的に優れていることが多く、今の時代には却って魅力的に見えるかもしれません。泉屋博古館の「絵描きの筆ぐせ、腕くらべ」は、そうした見直しのきっかけになり得る展覧会でした。ほとんどのツアー参加者は出品作家である望月玉泉や尾竹国観の名前を知らなかったでしょうが（玉泉は川合玉堂の師、国観は第三回文展の二等賞を菱田春草とともに受賞した実力者）、絵そのものの巧みに感服、といった様子でした。（nori）



②日時：9月15日(土) 午後2時から
 講師：深谷克典（名古屋市美術館副館長）
 申込締切 ①8月4日(土) 必着
 ②9月1日(土) 必着

〔申込方法〕

名古屋市電子申請サービスまたは往復はがきにて。往復はがきは、郵便番号・住所・氏名・電話番号・聴講希望日（1つまで）・聴講人数（2名まで）を記入し、〒460-0008 名古屋市中区栄2-17-25 名古屋市美術館「解説会」係まで。応募者多数の場合は抽選。詳細は名古屋市美術館ウェブサイトにて。 ※会場は2階講堂、定員180名 ※聴講無料。ただし、展覧会観覧券（観覧済み半券可）が必要。

■夏休み こどもの美術館「どがおもしろい?スペシャル」（特別展と同会期）

所蔵作品と一緒に来館者の感想を展示し、多様な見方・楽しみ方を紹介します。当日会場で感想を書いて参加もできます。 料金：常設展観覧料必要（特別展の半券可） 申込：不要

休館日は月曜日（祝日の場合は翌平日、ただし、8月13日は開館）、9月25日(火)～10月5日(金)です。詳しくは、名古屋市美術館ウェブサイト（http://www.art-museum.city.nagoya.jp/）をご覧ください。（よ）

展評

2018年 5 月30日(水)～ 6 月10日(日)
文化フォーラム春日井・ギャラリー

西本喜美子写真展
「みんなで遊ば、楽しかよ！」

2016年に開催した「アドルフ・ヴェルフリ展」の関連企画の講演会の中で都築響一氏が紹介された西本喜美子さん。「おばあちゃんの自撮り写真」で知られるアマチュア写真家である。彼女の展覧会が愛知で開催され、実際の作品を目にすることができた。

写真は現代においては、誰でも気軽に手掛けられるメディアとなっている。最近はスマートフォンについているカメラが高精細でしかも手軽に高度な加工を施すことも可能である。誰もが写真表現を楽しめるばかりか、インスタグラムなど自分が撮った写真をSNSにアップすることで、それをさらに世界に向けて発信することができる。中でも自撮り写真は最も身近なモチーフとしてSNS上にあふれている。

しかし、西本さんの作品は衝撃的だ。物干し竿につり下がった西本さんや、ごみ袋に入れて捨てられた西本さん、車に轢かれた西本

展評

2018年 5 月22日(火)～ 7 月 5 日(木)
後楽荘（企画・極小美術館）

高北幸矢インスタレーション
「百年に、落花。」

岐阜にある日本料理の老舗旅館、後楽荘は、江戸時代初期の蠟燭・油商「伊勢嘉商店」に始まり、明治の後期に風流人でもあった四代目が茶席と庭園を増築、60年ほど前から料理旅館となった場所で、その長い歴史を物語る器物、家具、着物、蔵が今も残されています。

今回は、この後楽荘で高北幸矢がインスタレーションを展開しました。木を彫って作った椿の花が庭園のそこここに配されているのですが、高低差のあるこの庭園に散らされた赤い椿は、庭園の空間としての在り方に改めて思いを至らせるような、不思議な効果を生んでいます。庭園には他には花と呼べるものは殆んどなく、色彩は木々の緑色、枝の茶色、庭石の灰色などに限られるため、赤い椿の花びらはひと際目を引くものでした。

料理旅館ですから、食事をいただきながら、もしくはお茶をいただきながらこの庭園を鑑賞することができますが、ガラス戸のこちら側から、椿の散らされたあちら側の世界を見ると、ガラス戸が二つの異なる世界を隔てる境界となっているようにも思えました。

食事をする部屋を出て廊下を少し歩くと、古い箆筒のある空間に行き着きます。箆筒の

BOOK

『コレクションと資本主義 「美術と蒐集」を知れば経済の革新がわかる』
(水野和夫、山本豊津著 角川新書 2017年)



経済学者と現代美術の画商という異分野のお二人の対談集である。経済学者である水野氏はミュージアムの基本概念である「蒐集」という思想を通じて資本主義というものを捉え、さらに現在に資本主義の終焉を見る中で、アート の視点からヒントを見つけようとする。そのユニークな視点は人間の経済行動を数学的合理性で説明することの限界を感じたことからきているのだという。それに対し山本氏は豊富な美術の知識と鑑識眼を武器に

さん、酔っぱらった西本さんに、宙に浮いた西本さん・・・いずれもかなり演出をして、きちんと三脚で撮影され、コンピュータで加工が加えられたもので、写真としてかなり作りこまれている。一方、写し出されているイメージは遊び心満載、ユーモラスで見る人を楽ししい気持ちにさせる。見る人に楽しんでもらいたいという気持ちは会場づくりにも表れていて、会場を訪れた人も同じように自撮り写真を撮影できるように作品制作に使われているのとはよく似た小道具も置かれていた。

会場には自作のスタジオで制作した色彩の美しいオブジェ写真も展示され、さらに読んでいるとそれらのオブジェが生き物として愛おしくなってくるようなテキストがつけられ



引き出しが開いていて、溢れんばかりの赤い椿が見えています。赤という色彩は、私たちの血液の色でもあり、艶なるものも感じさせます。それが、この長い時を経た旅館の空間の中で異彩を放つのです。何か、不思議な魔術のように、空間を作り変えてしまう赤い赤い椿の花…。

展開された場所が単に作品を見るための空間ではないということも、このインスタレーションを特徴づけるものでしょう。食事をして、あるいはお茶をして、話をして、思い思いのひとときを味わいながら、非日常的な空間を体験する、という一連の流れの中にあるインスタレーション。それは茶の湯の世界における芸術鑑賞の仕方をも思わせるのですが、このような見せ方は、逆にひとつの現代的なアートの在り方ともいえるのでしょう。(AN)



高北幸矢インスタレーション
《百年に、落花。》 2018年 後楽荘

最先端の現代美術の作品を経営活動に結びつけてきた経験から、資本主義とアートの共通点を探ろうとする。これまであまり語られてこなかった美術に対するアプローチであると思う。

美術の世界においては、生前に売れた絵が1点だけだったというファン・ゴッホのエピソードがくり返し語られることが示すように、画家の創作物への評価と経済的成功は必ずしも現在形で連動しないという考えがあり、創作活動というものはどこか神聖さを帯びていて、経済活動とは遠いものであるべきだという空気もある。ところが、二人の対談を通じて美術史を資本主義の歴史との関連で見えていくと、例えばピカソをはじめとする絵画という表現メディアの終焉が資本主義の終焉と一致するといったように、まさに同じ現象を別の角度から見ていただけだったと思わせるほど、かなり緊密に連動していることが明らかにされる。さらには現在のマイナス金利の経済状況と、あらゆる表現がやりつくされ、「イスマ」を失い、どのような表現を模索し、新しい価値を生み出していけばいいのかという中での「マニエリスムの」な現代の美術の状況がびたりと一致していることを指摘し、現在ほど芸術と資本主義の距離が近づいた時代はないと言う。お金と芸術の共通項という視点も興味深く、芸術というものの在り方について考えさせてくれるかなり示唆に富んだ内容だった。(hina)

れ、フォトエッセイのように構成されていた。言葉の一つ一つは方言が交じった温かいもので、張りつめた現代生活を送っているわたしたちに優しく染み入ってくる。表現を楽しみ、見る人を楽しませようとする西本さんの表現は、見る人の心にすうっと入り寄り添ってくれる。そして彼女の写真に向かう姿勢は、いくつになっても新しいことに挑戦できるのだと

展評

2018年 6 月30日(土)～ 8 月11日(土)
Gallery HAM(名古屋市中種区)

Nao Kawano Fujii “FLASHBACK part 2”
COLLECTING TRACES

本紙前々号106号で紹介したNao Kawano Fujiiの「その後」の展覧会が開催された。昨年11月の個展では、ギャラリー内部に設けられたコンクリートの土間に、赤や黄色に彩色されたガラスの破片を撒き散らし、さらに天井からはその破片がシリコンで貼り付けられた「エアキャップ」と呼ばれる梱包材が、吊るされていた。展覧会終了後、ガラスの破片はシリコンによって、キャンバスに貼り付けられ、絵画として再制作、提示される予定だった。

果たして今回の展覧会では、その表面にガラスの破片を纏ったキャンバスは、正しく「絵画」のように壁に架けられた。また、ガラスの破片が貼り付けられた額縁には、昨年の制作時にガラス壘を金槌で割る映像が、大きな音とともに繰り返し投影される。「破壊」と「再構成」が循環する場を現出し、「モノが持つ記憶」を呼び起こそうとする作家がたどり着いたのが、「事物としての絵画」であった。

だが、今回の展覧会では、そうした記憶にまつわる表現よりも、サブタイトルにも掲げられた「痕跡」という、より即物的な要素が目目された。例えば、エアキャップを版とし

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

音楽と絵画

音楽は耳で聴く芸術ですが、目で見える芸術である絵画の中にはしばしば音楽がとり入れられています。音楽の取り入れ方は様々ですが、非常にわかり易いものとしては、楽器を弾く人物像を描く作品が挙げられるでしょう。

世紀末のウィーンで活躍した画家、グスタフ・クリムトの制作した《ベートーベン・フリーズ》の中に「ポエジー」という場面があります。そこにはギターと呼ばれる豎琴を奏でるギリシャ風の人物が描かれていますが、この人物が一体どのような音楽を奏でているのかは全くわかりません。

ですが、私のイメージでは、ずっと続いていた浮遊する女性のモチーフがこの楽器を奏でる人物の後で一旦途切れるのであり、ギターの音はそれを合図するかのように「ポロン」と鳴ったのではないかと。もちろんこれは絵画をめぐる一つの解釈に過ぎず、他にもいろいろな考え方があるでしょう。

つまり、絵画の中に音楽が描き込まれていても、実際にそこに音はないので、私たち鑑賞者はさまざまな音楽を想像することが可能ということになるでしょう。

漫画の中にも、音楽が描かれることがありますが、以前もこのアートペーパーの誌面で採り上げた『のだめカンタービレ』では、主人公ののための演奏するピアノ曲をはじめ、

わたしたちに希望を与えてくれる。

モダニズム写真は写真屋さんであるプロフェッショナルではなくアマチュア写真家によって切り開かれたという歴史がある。誰もがアーティストになれる今の時代、アートがより身近になり、多様で優れた表現がみんなのものになっていく、なんだかワクワクする時代に突入してきたなと思う。(hina)

てその表面を紙に“転写”した作品では、重なる個々のドット（斑点）が、異なる擦れ具合により画面に深い奥行きを与えていた。

さらに、より強い印象を受けたものが、高い台座に無造作に横たえられた「物質」であった。前回の展示で、その表面にガラスの破片を纏い、天井から吊るされていたものが台座に置かれていた。よく見ると、その物質はエアキャップではなく、その表面に塗られていたシリコンの“皮膜”であった。剥がされたシリコンの皮膜とは、裏側から転写されたエアキャップの「痕跡」でもある。緩く巻き込まれた皮膜は、内側にガラスを包み込み、その表面はあたかも地表のうねりを見せるようでもある。以前吊るされていた物体が、さらに言えば、かつての現実が逆に内側へと重層的に巻き込まれ、横たえられていることに想いが及んだ時、どこか混沌さを感じた前回のインスタレーションから、より構造的なものへと踏み出した、作家の矜持すら感じられた。

ただ、今後しばらくの間、作家は活動を休止することになると聞く。(J.T.)



会場風景

オーケストラの演奏なども登場し、多くの音楽が描き出されます。私たちは音を聴くことが出来ないで、そういう意味ではおのずとその理解には限界があるようにも思いますが、クリムトの絵画同様、自由な想像を許すものともいえます。

音を表現することの限界にも関わらず、なぜか絵画や漫画の中に音楽を描きたいと考える、その理由は为什么呢。自分が表現方法としている絵という表現媒体を通じて、是非とも音楽の魅力を表現したい。絵を描く人はそのように思うのかもしれませんが。

反対に、ムソルグスキーがピアノ曲として作曲し、後にラヴェルが管弦楽に編曲した組曲「展覧会の絵」は、音楽によって絵を表現しようとしたものということになるでしょう。

このように音楽と絵画の表現者たちは、互いへの憧れを自分の芸術で表したいという願望を持つ場合もあるのだと思います。絵画から音は聴こえなくとも、また、音楽から絵を見ることは出来なくとも、それでも表現したいという熱意を感じさせられます。(AN)



グスタフ・クリムト《ベートーベン・フリーズ》より「ポエジー」1902年

【編集後記】
大阪北部地震に続き、西日本豪雨、そして人体に対して危険レベルの高温が続く猛暑、避難されている方々に心からのお見舞いを申し上げ、亡くられた方々に謹んで哀悼を表します。
雨が続く中、1990年代に社会を震撼させたテロを行ったオウム真理教の幹部であった死刑囚7人に対して死刑が執行されました。地下鉄サリン事件が起こったのは、私が社会人としての一步を踏み出した大学の卒業式の日でした。一日中あちこちで救急車が鳴り響いていた日のことは忘れられません。この二十年あまりに私たちと私たちの社会が経験したのは、それまで日本社会で機能していた多くのことが機能しなくなってきたということが、明らかになったということでしょう。来年には「平成」から新しい年号に変わります。年号が変わると時代の変化が視覚化され、新しい時代の到来を肌で感じられるのではないのでしょうか。誰もが自分らしく生きられ、多様さが受け入れられる社会になっていけばいいと思います。
新メンバーも加わってアートペーパー108号をお届けいたします。名古屋市美術館は開館30周年を迎えました。守るべきものを保ちながらも新しい時代に合わせて変化することも大切だと思います。これからも応援よろしく願い申し上げます。(hina)

アートペーパー第108号 発行日：2018年 8 月 1 日
発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄〈伏見駅・大須観音駅・矢場町駅〉下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)
年末年始
開館時間：午前 9 時30分～午後 5 時
祝日を除く金曜日は午後 8 時まで
※入場は閉館の30分前まで

Nagoya City Art Museum